

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：37304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370503

研究課題名(和文)台湾原住民語および東南アジア、東アジア諸言語における存在・所有表現について

研究課題名(英文) A Comparison of Existential and Possessive Expressions in Taiwan Aboriginal Languages and Southeastern and East Asia Languages

研究代表者

新居田 純野(NIIDA, Sumino)

長崎外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：30532915

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：日本語では「存在・所有」は存在動詞「YにXガアル」によって表わされる。本研究では、この表現形式におけるXとYの組み合わせ、およびXとYの関係から、「がある」構文の表わす意味的内容を「存在」「所属」「外在」「部分集合」「所有」「特性」「内在」「デキゴト」の八つに分類し、このような特徴を持つ日本語における存在・所有表現との対照から、ベトナム語、タガログ語、マレーシア語、タイ語、台湾原住民語のサオ語とブヌン語力社群方言の言語における存在・所有表現の構文形式とその特徴を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This paper is concerned with Existential and Possessive expressions in Japanese and Taiwan Aboriginal Languages (Thao, Bunun (Takibakha)), Southeastern Asian and East Asia languages (Vietnamese, Tagalog, Malay, Thai). Existential and Possessive expressions in Japanese are classified into existence, possession, belonging, special characteristic, internal existence, external existence, subset (of the entire set), and event. And they are described by sentence structure 'Y (existential place)ni X(existence)ga aru'. After having compared Japanese with these languages, this paper shows the characters in these languages and the differences among them.

研究分野：日本語学

キーワード：存在表現 所有表現 指示代名詞 現場指示用法 台湾原住民語 オーストロネシア系言語 アジア諸言語

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語における「存在」、「所有」の研究としては、存在動詞の意味、用法、機能等、多くの存在表現を扱った先行研究がある。一方、その他の諸言語では中国語、韓国語、タガログ語、モンゴル語等、台湾原住民語ではセデック語等の存在・所有表現研究があるが、その数は決して多いとはいえず、それぞれの言語形式の記述および特徴を述べているにとどまる。本研究では、各言語にみられる「存在」、「所有」に関する表現形式の調査および分析、分類から、それぞれの言語における存在、所有表現の共通点や相違点についての考察を行い、そこからみえてくる各部族や民族としての根源的な「存在」や「所有」に対するとらえ方を探っていくことを目的として、日本語における存在・所有表現との対照から各言語ごとの現地調査を行った。

(2) 外界物の「存在」また「所有」を言語的に投影する品詞として、存在・所有・状態を表す動詞のほか、指示代名詞がある。それら指示代名詞（以下、指示詞）は、外界の存在事物と人間との距離関係や空間把握、または、所有関係（自分の縄張り（領域）か、人の領域か、自分の所有物か人の所有物か、自分から見える領域のものか自分視野（テリトリ）の内側か外側か、など）のシステムやその運用法（文脈指示・観念指示）を、投影する言語記号であるからである。

そのような意味で、指示詞の東アジアにおける用法を対象とするが、本研究期間においては、下記のような理由により（即ち、比較基準の統一の必要性、および、各言語方言単位での正確な実態把握の必要性）、一定の調査方法の確立、地域ごとの新たな実地調査を中心に研究を行った。

2. 研究の目的

(1) 各民族や部族が話す言語には、有形、無形の「もの」に対する「存在」観や「所有」

観が言語表現に託されていると考えられる。そこで、本研究では、各部族や民族における「存在」「所有」に関する表現形式を調査して、それぞれの言語表現を分析し比較をしていくことで、類型論的な視点からのそれぞれの言語の特徴についての言及をめざし、さらに人の根源にかかわる「存在」「所有」に対する部族、民族のとらえ方の共通点、相違点を表現形式との関係から明らかにすることを目的とした。

(2) 指示詞の用法の基礎となっている現場指示用法について、中国、フィンランドの2分法・3分法の用法の実態について、現地調査・アンケート調査などを行った。当該地域の特に3分法の詳細を具体的に明らかにし、2分法との史的関係を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 調査の準備段階として、先行研究に取り上げられている存在・所有表現の用例の再収集および分析をもとに、本研究者の日本語における存在・所有表現の意味的内容の分類を精査した。そして、その意味的内容における各用例について、諸言語における母語話者を対象とした個別聞き取り調査（媒介語は日本語と英語）を実施して用例を収集（一部は英語からの翻訳依頼もあり）した。収集した各言語における用例を検討したうえで、その内容確認のために個別聞き取りの再調査をした上で、収集した各言語資料について、日本語との対照及び存在・所有表現の類型化を試み、その表現に見られる文法形式から各言語を話す部族や民族の「存在」、「所有」に対する捉え方の共通点や相違点について考察を行った。

(2) アジア言語・方言における指示代名詞（コソアド詞）の用法について、現場指示詞の用法に焦点を当て、歴史的言語地理学的研

究のため、現地調査と分析を行った。なお、以下の方法などによってアジア言語・方言の調査を行った。

先行研究による現場指示の用法の用例収集とその分析（論文等の用例を資料とした分析考察）

母語話者（留学生）を対象とした個別聞き取り調査（絵を見せての調査、用法の聞き取り調査等）

現地での現場指示のシミュレーション調査

・個別実地調査 1名毎に、複数指示物を距離別に部屋などに配置しての指示調査

・多人数実地調査 15名前後以上による教室などでの現場指示用法のシミュレーション調査

話し手・聞き手同一視点の状況によるシミュレーション調査(検討案) 高橋調査法による調査、個別に画像を見ての聞き取り調査、可視不可視調査等を、現場を設定しながら行う。

4. 研究成果

(1) 存在・所有表現の現地調査およびその分析における成果は次の諸点である。

各言語によって存在構文と所有構文の受け持つ意味的内容が異なること

日本語では存在構文（～がある）ですべての意味的内容を表わし分けることができるが、各言語では、すべての意味的内容を包括できる構文形式が必ずしもないこと

「存在」、「所有」という観念が言語表現に託されていると考えるならば、それぞれの部族や民族において、民族間で「存在」、「所有」の観念に違いがあること

個別の調査結果では、同じ台湾原住民であっても存在を存在ととらえる部族と「存在」を「所有」ととらえる部族間の違いがあること、が明らかになった。

(2) 指示代名詞の実態調査によるもっとも

重要な成果は次の諸点である。

辞書や先行研究には記載されていない用法（3分法など）の存在があること

先行研究の解釈は、分析も実際の調査法にもまちまちで、相互に比較する資料としては不十分であること

使用者自身（被調査者自身）も、何分法かを自覚が出来ておらず、2分法言語地域の話者でも調査されて初めて自分が3分法であることを自覚するような状態であること

調査方法を共通にした一定の調査によって、基本的な現場指示詞の用法の実態をより精密に調査する必要があること、が明らかになった。

また、個別の調査結果では、以下のことを指摘した。

中国語でも、フィンランド語でも地域差が大きいこと

2分法から3分法への変化には、都市化による複雑化ないし異種方言の混成による3分法化などの理由が仮説できること

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

新居田 純野「ベトナム語の存在・所有表現 日本語の存在・所有表現との対照から」『対照言語研究』査読有、24、2014、pp.13-23

新居田 純野「マレーシア語の存在・所有表現 日本語の存在・所有表現との対照から」『長崎外大論叢』査読有、18、2014、pp.106-119

新居田 純野「タガログ語の存在表現 日本語の存在表現との対照から」『類型学研究』4、2014、pp.13-33

新居田 純野「サオ語とブヌン語カ社群方言の存在・所有表現 日本語の存在・所有表現との対照から-」『台湾原住民研究』査読有、19、2015、pp.75-102、風響

社

新居田 純野「タイ語の存在・所有表現

日本語の存在・所有表現との対照から」

『長崎外大論叢』査読有、19、2015、

pp.109-119

新居田 純野「オーストロネシア系言語

の存在・所有表現」『鈴木泰古稀記念論集』

国際連語論学会、2016（刊行予定）

安部 清哉「気候は、言語・方言を作る

か？-アジア言語の“Centum-Satum 的基
層語派”を区画する地理的指標となるか-」

『日本語学』、2013、pp.32-6（409号、

2013年5月号）pp.48 - 59、明治書院.

安部 清哉「指示代名詞の中国語陝西方

言における3分法とその地理言語学的特

徴（現場指示用法）」『東洋文化研究』査

読有、17（学習院大学）2015、pp.1 - 65

（pp.562-498）

安部 清哉・高木 愛子（協力）「指示代

名詞の中国語陝西方言における2分法

（現場指示用法）」『学習院大学文学部研

究年報』61、2015、pp.1-27

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新居田 純野 (NIIDA Sumino)

長崎外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：30532915

(2) 研究分担者

安部 清哉 (ABE Seiya)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：80184216